

論文の和文要旨	
論文題目	日本語を第二言語とする学習者の「自己像」形成における モチベーションの変容 ーL2 Motivational Self Systemモデルの観点からー
氏名	劉鑫（リュウキン）
グローバル化の進展や日本政府の国際化政策に伴い、日本国内で学ぶ外国人留学生の数は年々増加の一途を辿っている。彼らは母国において一定の教育課程を修了した後、自己の将来を見据え、日本への留学を選択している。多くの場合、留学初期段階では、専攻分野に関わらず日本語の授業を履修することが一般的である。この期間において、彼らは「日本語学習者」としての立場を持つが、教育機関での学習を終えた後も、日本語を使いながら進学や就職などの道に進むことにより、広義の日本語学習は継続する。日本語を使いながら人生を歩む彼らのアイデンティティーは、日本語学習者という枠を超え、「日本語使用者としての新たな自己像」（すなわち「言語（日本語）自己像」）を徐々に形成していく。また、それぞれの文脈で必要な日本語能力を習得すべく、広義の日本語学習を継続していくための新たなモチベーションを維持していく。従来の日本語学習者のモチベーション研究は、教育機関内における短期間の日本語学習者を対象とするものが大多数を占めており、教育機関を離れた後のモチベーションの変遷を包括的に捉えることは困難であった。しかしながら、多くの学習者は、教育機関での学習を終えた後も、長期間にわたって日本語を使用しながら仕事をしたり、趣味の世界で日本語話者と交流を持つなど、生涯を通じて日本語との関りを持ち、日本語を学びながら生活していく。こうなると、日本語学習はもはや彼らの人生の重要な一部を占め、彼らのアイデンティティーの形成において重要な役割を果たすことになる。管見の限り、従来の研究では、このように留学生の日本語学習モチベーションを生涯にわたる全人格的な視点で捉え、アイデンティティー発達の観点から、より包括的に理解するような長期的な視点が欠けていたといわざるをえない。以上の問題意識から出発した本研究の研究目的は、留学を終えた後も日本語の学習を継続している日本語学習者（使用者）が彼らの人生において、どのような「言語（日本語）自己像」を形成し、それが彼らの学習のモチベーションの継続にどのように影響するのかを明らかにすることにある。それを明らかにすることで、教育機関は、留学生の「言語自己像」の変化に注目し、彼らが長期的に日本語を学び続けるためのモチベーションを高めるための新たな教育戦略と教育観念を考えることができるのではないだろうか。 以上の研究目的に向けて、本研究では以下の三つの研究設問を設定した。 (1) 日本語を学びながら人生を歩む中で、留学生の「言語（日本語）自己像」はどのように変化していくのか。 (2) 日本語を学びながら人生を歩む中で、留学生のモチベーションはどう変化していくのか。 (3) 「言語（日本語）自己像」の変化と留学生の第二言語モチベーションの変化はどのように関連しているのか。	

なお、本研究における「言語自己像」は学習者が言語を学習する中で形成する自己認識やアイデンティティを指し、学習者がどのように日本語と関わり、どのように自分の一部として捉えているかを表すものである。「言語自己像」とは、「その人が自分をどのように見ているか、または他人にどう見られているかについて、言語の観点から形成されるイメージ」と定義する。そして、その定義からアイデンティティの特徴が組み込まれることが分かる。

第1章では、上記の目的を立てた背景や問題意識を述べた後、本研究における「言語自己像」を定義した。そして、研究目的と研究設問を示し、研究全体の構成図を提示した。

第2章では、モチベーションの先行研究を心理学の由来・第二言語習得分野における五つのアプローチを整理した上で、日本語教育における量的・質的研究について述べた。その後、本研究の枠組みである「L2 Motivational Self System」の研究を中国人学習者に焦点を当てたかどうかに分けて、先行研究を整理し、その問題点を示した後に、最後に改めて本研究の視点をまとめた。本研究は学習者をただの学習する人として認識するのではなく、全人格を持つ一人の個人として扱うこととする。そして、彼らのアイデンティティの発達の文脈に同じく注目して、日本語学習者のモチベーションを人生という長いスパンから捉え、その発達の文脈におけるモチベーションの変化について分析し、両者の関係について探ることとした。そのために、本研究は三つの側面から研究をデザインした。一つ目に、本研究の研究概念について、人生のアイデンティティ発達視点から日本語学習者のことをもう一回捉える必要があると先行研究から分かった。そのために、本研究は言語学習者自身の視点からできた「言語自己像」という概念を使用して、本研究をデザインすることとした。二つ目に、本研究の研究手法について、留学生の「言語（日本語）自己像」及びその変化を文化的、社会的、個人的な背景などの文脈の中に捉える必要があると先行研究から分かった。そのために、本研究は質的縦断研究として、ライフストーリー研究法を使用して、本研究をデザインすることとした。三つ目に、本研究の理論的枠組みについて、本研究の研究概念と同じく、人生のアイデンティティ発達視点重視する。そのために、日本語学習者の「言語自己像」に合わせて、モチベーションを捉える理論的枠組みとして、同じく「自己像」の概念を含むL2 Motivational Self Systemモデルを使用して、本研究をデザインすることとした。

第3章では、本研究の理論的枠組みである新L2 Motivational Self Systemモデルについて詳細に提示した。Dörnyei (2005, 2009) が提唱した元のL2 Motivational Self Systemモデルには、「理想L2自己」「義務L2自己」「L2学習経験」という三つの構成要素がある。しかし、DörnyeiのモデルはHiggins(1987)が提唱した「可能自己」の概念とそれに合わせての「自己不一致理論」に基づいて、第二言語習得分野で捉え直したものである。自己不一致理論には未来志向性という特徴があり、それに基づいて提唱したL2 Motivational Self Systemモデルも未来志向性が特徴である。しかし、本研究において、データを分析するうちに、従来の未来志向性のモチベーションで捉えきれない現象が見られた。そのために、本研究では生涯発達心理学の観点を入れて、未来志向ではなく、過去志向である「過去自己」の概念とそれに合わせての「自己一貫性理論」を提

唱した。それらの概念を第二言語習得分野で捉え直した結果に、「保持 L2 自己」という L2 Motivational Self System モデルの新しい構成要素を提案した。Dörnyei が提唱した「理想 L2 自己」「義務 L2 自己」「L2 学習経験」と、Buasasengtham・義永が提唱した「L2 社会的要因」と、本研究で提案した「保持 L2 自己」という五つの概念を新 L2 Motivational Self System モデルの構成要素として、本研究で使用する事とした。

第 4 章では、調査方法及び分析方法について述べた。調査方法はライフストーリー・インタビューである。本研究は経験の多様性を描くことを重視し、調査者を 4 名の中国人学習者に設定した。子どもの時期から社会人になるまでの日本・日本語・日本語学習に関する出来事を自由に語ってもらった。フォロアップインタビューも含めて、最大に 5 年にかけて、縦断的に調査した。

分析方法については、新 L2 Motivational Self System モデルを分析の枠組みとし、一般的な質的分析方法を使用して、データを脱文脈化し、コード付け、時系列に再文脈化し、協力者たちのライフストーリーとして構成した。構成された協力者たちのライフストーリーから、研究設問(1)「日本語を学びながら人生を歩む中で、留学生の「言語（日本語）自己像」はどのように変化していくのか。」に対して、言語自己像の抽出ができ、分析を行った。その後、ライフストーリーをさらに大きく時期区分をして、その区分に沿って、研究設問(2)「日本語を学びながら人生を歩む中で、留学生のモチベーションはどう変化していくのか。」に対して、本研究で使用する L2MSS モデルの 5 つの要因（理想 L2 自己、義務 L2 自己、保持 L2 自己、L2 学習経験、L2 社会的要因）のうち、どれに当てはまるのかを分析した。その後、研究設問(3)「「言語（日本語）自己像」の変化と留学生の第二言語モチベーションの変化はどのように関連しているのか。」に対して、研究設問(1)と(2)の結果に基づき、分析を行った。

第 5 章では、5.1 節から 5.4 節にかけて、4 名の中国人留学生の分析結果と考察を詳細に提示した。その後、5.5 節で上記に示した三つの研究設問に答える形でまとめながら、さらに深めた。

研究設問(1)「日本語を学びながら人生を歩む中で、留学生の「言語（日本語）自己像」はどのように変化していくのか。」に対して考察した結果、日本語学習者の「言語（日本語）自己像」は、7 つの段階にしたがって、文化的な興味から始まり、学習を通じて専門的な能力へと発展し、最終的には社会的な統合と自立へと至る。この過程で学習者は、日本語を単なるコミュニケーションの手段としてだけでなく、自己実現と社会貢献のための重要なツールとして位置付けるようになる。この変化の過程は、言語学習が個人のアイデンティティの発達にも影響を与えていることを示していると考えられる。

研究設問(2)「日本語を学びながら人生を歩む中で、留学生のモチベーションはどう変化していくのか。」に対して考察した結果、4 名の日本語学習者にモチベーションの変化のパターンが見られた。そして、相違点と共通点がある。

相違点として、「学習者の長期間の日本語学習に対するモチベーションの持ち方は日本語に関して、最初の目標の設定具合と最後の目標の実現具合によって変わる」という結果が見られた。それは以下の 2 点である。

①最初に日本語を目標としない学習者は最後に日本語と関連する仕事をする時に、彼らのモチベーションを支えるのに対して、理想 L2 自己、義務 L2 自己、保持 L2 自己、L2 社会的要因、L2 学習経験の多種類の影響要素が必要であるとする。②最初に日本

語を目標とする学習者は最後に期待通りの日本語と関連する仕事をする時に、義務 L2 自己という影響要素だけ消えて、モチベーションが一番理想的になる。逆に、最後に期待通りの日本語と関連する仕事をしない時に、保持 L2 自己という影響要素だけ残り、モチベーションが一番消極的になる。

共通点として、「人生という長いスパンで学習者の日本語学習を見ると、やはり理想 L2 自己や義務 L2 自己の姿勢でずっとモチベーションが保たれるわけではなく、最後に全員が保持 L2 自己の方向へ収束していく傾向が見られる」という結果が挙げられる。

研究設問(3)「言語（日本語）自己像」の変化と留学生の第二言語モチベーションの変化はどのように関連しているのか。」に対して考察した結果、日本語学習者の L2 モチベーションは彼らの言語自己像と深く関連して変化していくということが明らかになった。

第 6 章では、分析の結果に基づき、本研究の意義として以下の三つを挙げた。そして、三つの研究意義はそれぞれに 6.2.1「概念的枠組み」、6.2.2「理論的枠組み」及び 6.2.3「質的分析方法」という三つの側面から相互に支え合い、総合的かつ一体的に本研究の結果を支持している。

まず、一つ目は、概念的枠組みとして、「言語自己像 (L2 Self)」という新しい概念を使用することである。第二章のモチベーションの先行研究からもわかるように、従来のモチベーション研究は教室場面を中心とするものが多くて、そのために、学習者のことをただの学習する存在として捉えるような視点が多かった。しかし、現代の教育において、学習者の全人格的な成長を促進することがますます重要視されている。教育の焦点が単なる知識の伝達から、学習者のアイデンティティ発達と自己実現に向けた包括的なアプローチへとシフトしているためである。本研究の意義は、学習者中心の教育と学習者オートノミーの観点から、学習者のモチベーションをいかに捉えて高め、その先に学習者の全人格的な発達を支援できるかを探求することにある。

次に、二つ目は、理論的枠組みとして、過去志向による「自己一貫性理論」の提案とそれに基づく「保持 L2 自己」という構成要素を新しく追加した L2 Motivational Self System を使用することである。本研究のデータによって、「保持 L2 自己」の有用性が証明された。「理想 L2 自己」と「義務 L2 自己」のように強い目的性は無い。学習者の言語能力が一定程度に達したとき、更なる言語能力を求める欲求が消えてしまう傾向が本研究の学習者から見られた。彼らの周囲の環境あるいは自分自身への要求により、既存の言語能力を下がらせたくない欲求があった。その時、学習者の彼らは現状維持のため、既習言語の使用に関心を向かせる現象が見られた。本研究では、その現象における自己像を「消極的な理想 L2 自己」として見られ、「保持 L2 自己」の概念を提案し、データによって実証的に説明された。そして、「保持 L2 自己」が証明されたことは、「自己一貫性理論」の証明にもなりうると考える。いわば、過去志向性が特徴的で、長いスパンで個人のアイデンティティの一貫性を維持するために形成した「過去自己」という自己像も存在しうると考えられる。「過去自己」⇔「自己一貫性理論」⇔「保持 L2 自己」のように、三者は支え合って、相互に証明し合う関係にある。そして、Ushioda (2012) が自身のモチベーションの研究領域で言及した「モチベーションをよりダイナミックで、発見的、社会的に構築されるものとして、現代的な自己、アイデンティティ概念で再概念化/再理論化する必要がある」という指摘も、この三つの概念の提案によって、解決できたのではないかと考える。また、「保持 L2 自己」を使用することで、

学習者の学習の実態をより多様化に分析できた。

最後に、三つ目は、分析方法としてライフストーリーの質的分析手法を用いて、具体的な語りを提示しながら、分析の過程を詳細に記述したことである。

以上の研究意義を提示した後に、三つの研究設問の結論を基に、教育機関における留学生を対象とする教育支援と、教育現場に対する今後の研究課題に対して、それぞれに三つの提言と五点の今後の研究課題を述べることで、これからの研究の方向性を示し、本論文を終えた。